◇　出でよ、大志を持った若者、研究者

1、尖閣に賭けた　男たちの物語

(1)、尖閣に　漁業王国を　夢見た男

捨てられた貝殻　何と宝の山！！

明治新政府は、明治 5 年、首里王府を廃し、琉球藩とした。

明治 12 年 3 月、琉球処分官松田道之は、3 度目来島し、警部・巡査 160 人余、熊本鎮台分遣隊員を率いて、首里城に出向き、これまでにない強い姿勢で対応した。

廃藩置県の御達書を手渡して、世替わりを宣言した。琉球藩主尚泰は首里城を明け渡し、琉球王国はここに滅んだ。島内は、親日の開化党と反日の頑固党の二派に分かれて激しく対立、揺れに揺れ動いていた。

そんな騒然とした最中、ハッピ姿(？)をした若い旅人が那覇海岸界隈を気忙しく歩き回っていた。23 歳の精悍な面構えした若者は、福岡八女生まれの茶行商古賀辰四郎だった。那覇港桟橋に降り立ったとき、海岸や道の傍らに無数の貝殻が散乱しているのを見て驚いた。島人が中身を食べて打ち捨てた貝殻だった。

古賀　辰四郎

うず高く積まれた貝殻の山は、真珠の輝きをもつ高瀬貝や広瀬貝、夜光貝だった。幕末期の開国とともに、西洋から洋服が導入された。洋服には、貝ボタン(釦)が使われる。神戸に見本を送り調べさせたところ、高級な貝ボタン原料だと判った。

古賀が八女茶売りから、貝殻を扱う海産物商に転じたのは言うまでもない。

島人に貝殻を集めさせ、買い取り、これを外国商館へ売り込み、莫大な利益を得た。

南西諸島は、海産物の宝庫だった。貝ボタン原料の貝類のみならず、フカヒレやナマコ、べつこうなどがあった。各地をとび回っているうちに、八重山諸島が。海産物が豊富な島と知った。来沖 3 年後の明治 15 年 2 月、古賀商店八重山支店を設置した。

と、ある時、島の漁師から洋上にあるという不思議な無人島の話を耳にした。

天空は夥しい海鳥が乱舞し、陽は遮られて昼なお暗く、大群が一過すれば、激しい糞弾の攻撃を受け、襲いかかる異臭には、寸時も我慢できないという。

この絶海の孤島は魚突く銛（イーグン）に似た険阻な岩島とクバ樹が繁茂した島からなっていた。漁師たちはユクン（イーグン）・クバシマと呼んでいた。

尖閣諸島である。古賀は、この話に強い好奇心をかきたてられた。

イクンヌフゥッドイ（イクンの大きな鳥：アホウドリの意）もいると聞き、胸は高鳴った。

漁民・冒険家 渡島　　領有後 古賀に 開拓許可される

明治 18 年には、明治政府は、出雲丸を用船し、尖閣諸島調査を実施した。

その頃には漁民や古賀ら冒険家たちは海鳥や海産物を求めて渡島を試みていたかも知れない。だが、尖閣諸島は、遠隔の地で、黒潮回廊に位置し、潮の流れが速く、海は荒く、帆船や手漕ぎで、渡島するには、危険極まりない。

昭和 20 年 8 月、若者 8 名がサバニ(長さ 6 ﾒｰﾀｰ)に乗り込み、魚釣島から、帆走手漕ぎで、石垣島まで渡海した。救助要請の連絡の飛脚舟である。170 ｷﾛ離れた石垣島に到着したのは、出発後の 72 時間あとだった。当時は時化もない好条件下の航海だった。だが 8 名の若者が不眠不休で漕ぎ続けても、まる 2 日間余を要している。

この事実は、尖閣諸島への帆船手漕ぎによる航海は至難であることが示している。

明治 8 年政府から琉球藩へ汽船大有丸が下賜された。同 15 年には沖縄開運会社が発足、県より大有丸を借り受け、宮古八重山航路が開かれている。

明治 23 年県属塙忠雄の聞取調査報告には、「久場島・魚釣島に渡航したる糸満人は総計 78 名〔大有丸 32 名、鰹船 26 名、与那国 20 名〕とある。最近では現地に小屋掛けを為し移住する計画と認め候。食糧運搬の為（石垣島に）帰航した糸満人某より該島の概況及び物品（夜光貝殻 1 個〔漁獲物〕・寛永銭 4 枚〔漂着物〕）を添えて上申候」とある。文中の大有丸の他、〔鰹船 26 名、与那国 20 名〕は意味不明だ。ともあれ、大有丸のような発動機船が出現して、渡海者は増加していった。

魚釣島南西海岸に建てた古賀村：○印

明治 23 年、26 年と沖縄県知事は、水産物取り締まり上から、政府に対して尖閣諸島の所轄決定伺いを上申したが、国外問題で多難な折とだと慎重だった。

明治 28 年 1 月、日清戦争も終局を迎え、政府は、ようやく内治に目を転じることができ、尖閣諸島を無人無主の島であるとして、日本領有を宣言した。

多数が島の開拓を出願したと思われるが、古賀に許可が下された。

明治 29 年 9 月、古賀辰四郎は、魚釣島他 3 島を借り受け、開拓事業に着手した。

翌 30 年には 2 艘の改良遠洋漁船を以て先遣隊として、石垣島から出稼ぎ労働者 35 人を派遣、翌 31 年は大阪商船会社の汽船須摩丸を借船して、古賀自ら 50 名を引き連れ、住家建築資材など満載して渡航した。

この須磨丸は明治28年建造、日本初の千トンを超す商船であり、全通した二重底の商船として、日本造船史上に特筆すべき船とされている。この豪華客船須磨丸を、当時無名な古賀が用船したわけだから、尋常でない。彼の金に糸目をつけないスケール大きさ、先見の明、剛腹さには驚かされる。

古賀が用船した日本初千トン超す商船「須磨丸」
（「昭和船舶史」より）

嗚呼　是れ　古賀氏の王国に あらずや !!

明治 41年5月、尖閣諸島を訪れた宮田漏渓（琉球新報主筆）は、魚釣島の古賀村を見て、「嗚呼、是れ古賀氏の王国にあらずや」と讃嘆している。

海岸の岩礁を砕いて船着き場・堀割を開き、岩場を切り開いて、堅固な石垣を張りめぐらした中に、住居家屋や作業場、事務所、貯蔵場などが建ち並び、敷地面積は約3千坪の広さを誇っていた。

また、後方山地の原生林は伐り倒され、約60町歩を開墾し、自給自足の態勢を築いていた。定住移民50名を引き連れてスタートした開拓経営は、移民総数は248名、戸数99戸に達し、殷賑を極めていた。

開拓本拠地・魚釣島古賀村の偉容。岩場切り拓いた三千坪の敷地に住居家屋や作業場、事務所、貯蔵場などが建ち並び、中央に国旗日の丸がはためいている。（明治41年）。

其の財を費やすこと三拾餘万円、年月を積むこと二拾有五年。尖閣列島の經營者たる古賀辰四郎氏が、單身創業的の勇氣を揮つて仝列島の爲め尽し來たれるもの亦た至れりと云はざるべからず」・・「仝氏が明治十七年初めて人を搓し仝列島を探檢し、愈々經營すべきを確信したるより以來、今茲明治四十一年に至る迄、二拾有五春秋間の經歴・・開拓せんことに向つて努力、勇闘を續け來りたるの事歴を詳知せるものは、・・古賀氏の一王国と称するは、異言なかるべきにあらすや。

（琉球新報「尖閣列島と古賀辰四郎氏」宮田漏渓 明治 42.6.15）

この明治 41 年時における開拓事業は、カツオ節製造をはじめとして、アホウド羽毛採集、鳥剥製、鳥油、鳥肉肥料づくりや鳥糞（グアノ）採集、また海産物（フカヒレ、いりこ、貝殻、べっ甲）採集、植林(樟、松、杉)など多面にわたって行われていた。

開拓事業 アホウドリ羽毛採取から 鳥剥製づくりへ 転換

古賀は開拓事業は、アホウドリ羽毛に目をつけ、海産物採取と併せて、スタートさせた。アホウドリ羽毛は神戸横浜の外商に好評だった。初年の明治 30 年には、羽毛は 1.1 万斤、2,3 年目には 6.5 万、8.5 万斤を採集した。これが利益の大半を占めていた。ところが 4 年目以降 2.5 万～1 万斤以下に激減した。職人任せの乱獲によるものだった。古賀は、捕獲制限策を徹底させた。8 年目で漸く僅かな増加に転じたが、大幅な生産は見込めない。

開拓事業は、大きな柱を失い、衰微していくかに見えた。

だが、賢明な彼は、次なる計画を目論んでいた。

南北小島に無数にいたカツオドリ、アジサシ類に目を向けていた。

これら海鳥の剥製は欧米諸国の婦人帽子装飾用として有望だった。

古賀は、各地をかけずり廻り、剥製づくり職人を探し回った。

明治 37 年、種々苦心の末、横浜で南洋帰りの剥製職人見つけて、16 名雇い入れ、南小島で鳥剥製事業に着手した。彼らは、南鳥島の水谷新六の工場で働いていた剥製職人だったと推測されている。

天空を乱舞する南小島の海鳥と古賀辰四郎？
（明治 41 年）

尖閣諸島の海鳥剥製も、横浜神戸の外商に望外の好評を博したという。
明治 39 年には、鳥剥製品は、20 余万羽を輸出し、翌 40 年は 約その 2 倍以上の取引を行った。また、剥製製造の際に出る鳥肉は絞って油を取り機械油にし、肉や骨などは肥料にして売り込んだ。
海鳥事業は大きな伸びを示し、開拓経営は年々進展の途にあった。

鳥剥製 限界あり　カツオ節製造に 大きな期待をかける

だが、古賀は、これに満足していなかった。
海鳥事業の先輩である玉置半衛門と水谷新六から教訓を得ていた。
鳥島は玉置に、南鳥島は水谷によって、乱獲され、海鳥事業は衰退した。
古賀は、捕獲制限しても、限界あることを深く認識し、列島経営を盤石にする他の有望な事業を模索していた。彼が考えていたのがカツオ節製造だった。
明治 28 年頃、宮崎のカツオ船（当時は帆船）が慶良間沖で操業していた。
慶良間座間味の松田和三郎は、カツオ業が有望と知り、島の若者をカツオ船に乗せ、漁労・節製造技術を習得させた。松田らは、のち暴風で遭難した静岡の鱶延縄船を買い取り、カツオ漁を試み、カツオ節製造を始めた。
明治 34 年、沖縄慶良間島でのカツオ業の誕生である。
以後、カツオ業は、沖縄の基幹漁業として、枢要な位置を占め、製糖業と並び沖縄経済を支えるほどに、大きな発展を遂げる。

南西諸島は、カツオの好漁場だった。宮崎・鹿児島のカツオ船が南下し、沖縄本島近海で操業、賑わいを見せていた。尖閣諸島はこれに劣らず好漁場だった。
尖閣諸島を見聞した漏渓は、前出の新聞において、カツオが沿岸を帯状で群れなして回遊して来、頭上は無数の鳥が鳥巻となって乱舞、海中に突っ込みながら、カツオを追いかけ回している様を驚嘆して報告している。

古賀が、カツオ業に乗り出したのはいうまでもない。
カツオ業は高度な技術が要だった。生きた小魚の餌にして、カツオの群をおびき寄せ、一斉に竹竿で釣りあげる。また節製造は、カツオを煮炊き、焙乾してカツオ節に仕上げねばならない。これに習熟したカツオ船漁師や節製造職人たちを連れてくる必要があった。これは至難な上、時間もかかる。
だが、古賀は、ねばり強さと不屈の精神で以て、みごとこれをやり遂げた。
明治 37 年には、カツオ船 3 隻を内地において新造し、魚釣島にカツオ節製造工場も建て、宮崎県より熟練のカツオ漁師たちと節製造人数 10 人を雇入れて、翌 38 年には、カツオ船を操業させ、節製造を始めた。

古賀の慧眼、決断の速さ、すぐさま先進地に赴き、漁師と節職人を探し当て、尖閣諸島に招き、カツオ漁と節製造を成し遂げた行動力には驚かされる。

掘割に帰港するカツオ帆船。エサの小魚もカツオも島の周りで獲れ、他に比し数倍有利。右岩場に並んでいるのは、東北福島から連れてきた子供たち。(明治 41 年)

餌小魚・カツオも 沿岸で 漁場近い 操業 数倍有利

古賀は、「藍綬褒章下賜ノ件」(明治 42 年) の中で、「同列島ニ於ケル鰹漁ノ有望ナルコト 第一ハ食餌ノ潤沢ナルト鰹ノ魚群ガ極メテ近岸ニマテ来集スルニヨリ必スシモ遠洋ニ出漁スルノ要ナキ等孰モ天与ノ好適地ナル・・」と自賛し、沿岸で、餌の小魚も採れ、カツオも釣れる、漁場が近い利点をあげている。

件の漏渓も、久場島から魚釣島へと魚道が続く様を目撃し、その魚道は和平山(魚釣島の別称)から僅か十数町(約 1.5～2.0ｋｍ)ほどしか離れていないため、尖閣諸島の操業は日に 4 度の出漁が可能であり、「列島中鰹の大漁に際しては一日六,七千尾以上、一万近かくの鰹魚の釣り上げらることもありと云ふ」と驚きを以て記している。

当時のカツオ船は帆船である。が、尖閣諸島の漁場は沿岸近く、1 日に数度の出漁が可能だった。新造したカツオ船 3 隻は、操業結果は良好だった。
ところが、その年襲った暴風で 3 隻とも破壊された。

古賀は、翌 39 年にはカツオ船 5 隻を新造した。
彼の経済力もさることながら、スケールの大きさには驚かされる。
尖閣諸島でのカツオ節製造高は、年々6､7 万斤を越えて、「爾来一層ノ好成績ヲ収メツゝアリ」と記している。
カツオ節製造工場も、古賀一流のやり方で大胆大規模だった。
漏渓は見聞している。

其の鰹節製造塲に据へ付ある製造釜の太さは口經三尺四、五寸計りなるが六個相並びて一棟の内に据付られ、他に二個の製造釜が別屋の内に据へ付ある認めたり。此の外、不時の準備の爲めにとて四個の釜は用意せられありしが、此の一釜による鰹節の煮沸量は通常一回四百本に及ぶものあるが故に、六個の釜が仝時に活動する時は、煮沸を始めたるより僅々數十分時にして二千四百本の鰹節は、先づ其の第一次の製造を見る譯なり。然るに鰹節の製造は、其の全たく終了に至るまでには、燻蒸其の他六、七回の手數を經て始めて完成を告ぐる次第なるを以て、他に之れに處する設備は幾ケ所にもありたる･･。

古賀時代の鰹煮釜と煮釜用蒸篭。
（「思い出のわが島・太田正義画」

（前出「尖閣列島と古賀辰四郎氏」）

このように、古賀のカツオ業に賭ける意気込みは高かった。
その結果、尖閣諸島産カツオ節は、評価はよかった。
明治 42 年 5 月 25 日付沖縄毎日新聞は、「大日本水産会主催の第一回鰹節即売品評会で、古賀出品の鰹節は 2 等賞銀牌をもらい、本節十貫目に付き 53 円 50 銭で売れた」旨と報じている。
鰹節製造人は当初は宮崎県から雇入れたが、その後土佐節を製造するにあたって明治 41 年頃から四国方面の節削り女工に切り替わったようである。明治 43 年には、形状整い、品貨優良であるとして、市場で高い評価を得ている。

古賀辰四郎氏の經營に處する尖閣列島に於て製造せられたる鰹節は、主産地より雇ひ來られる熟練なる製造人に依て製造せられしものなれば、形状整い一品貨優良にして良く貯蔵に堪へ、亦雇人も一定の主義の下に一意熱心に改

良進歩を計り居る模様なれば、大に市場に於て稱揚せられ鰹節界に於ける一覇王たることは之を認むべきなり。

（沖縄毎日新聞 本県と鰹節 続 :勝男武士 明治 43.9.27）

明治 38 年に始めたカツオ業は高い勢いで伸びていった。明治 40 年には剥製生産高を超す勢いである。明治 39 年は 4.4 万円（前年 0.8 万円）前年比で 5.6 倍、翌 40 年は 4.8 万 円、前年比 1.1 倍の高い伸び率である。まだまだ伸びる勢いである。古賀は、このカツオ業に大きな期待を持っていた。

魚釣島古賀村でのカツオ製造光景、生産は年々高い勢いで伸びていった。(明治 41 年)

藍綬褒章授与　カツオ王国 目指した　壮大な 5 カ年計画

明治 42 年 12 月、古賀は、海産物商としての実績と尖閣諸島開拓の功績を認められ、藍綬褒章を授与された。 沖縄県においてカツオ業で功績あった松田の褒章に次ぐ第 2 号だった。県庁に燕尾服姿で出頭し県知事日比重明より褒章を受けた。

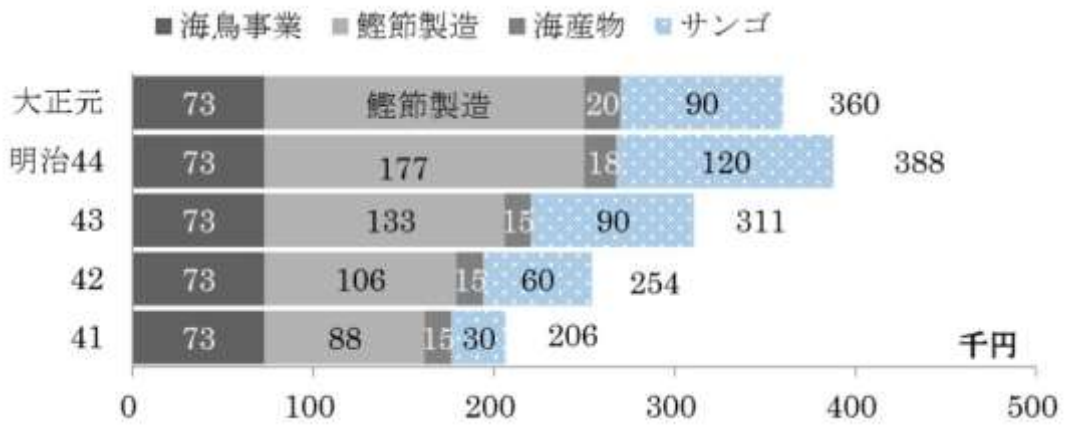
古賀が政府に提出した「褒章資料」がある。彼は、 このなかで、「同列島ニ対スル事業ノ経営ハ、将来拡張シ又新ニ着手スヘ キモノ多々アリ之カ経営ノ目的ヲ達セハ、帝国産業界ニ貢献スル所頗ル大ナラン」とし、 これからが本番、本領発揮だと意欲を燃やし、将来を見据えた壮大な計画を樹てている。

軌道に乗り始めた海鳥事業の剥製づくりは「監督者 3 名外 150 人」を雇入れる。

またカツオ節製造も拡大倍増し、カツオ船 17 隻新造、「監督者 3 名外漁夫 120 人～220 人」を雇入れる。 またサンゴ採取も計画している。

この 5 カ年計画について、各事業の収入予定金額をグラフにしてみた。

古賀の列島経営が如何なる方針だったか、この表は一目瞭然に示している。
カツオ節製造の伸びは断トツである。他方、海鳥事業は限界があり、生産見込みを5年間一定にし、また海産物の他に、サンゴ採取も計画し、大幅な生産も見込んでいるようだ。だが、サンゴ採取は実現を見なかった。



海鳥は有限だ。カツオは時季なると、海の彼方から回遊してくる無限の資源である。尖閣諸島はカツオの好漁場であり、豊漁し、良質なカツオ節さえ造れば、幾らでも売れる。古賀のカツオ業に賭ける意気込みが読み取れる。
カツオ船を毎年2～5 艘新造し、「監督者 3 名外漁夫 120 人～220 人」雇入れる。また、多数の船が行き来するから掘割・港の拡張、家屋工事も計画するなど意欲満満だった。古賀は、列島経営の要に、カツオ業を位置づけ、カツオ王国を目指していたとも言えよう。

	明治41年	明治42年	明治43年	明治44年	明治45年
鰹船(漁師) 漁　師	5艘（5艘） 120人	2艘（7艘） 154人	3艘（10艘） 220人	5艘（15艘） 220人	2艘（17艘） 220人

明治41年以降の資料がないので、この5ヵ年計画がどのようになされたか知らないが、カツオ節製造は、堅調に進展していたことは疑い得ない。
明治41年頃には四国方面の節削り女工に切り替え、43年には、彼の土佐節は形状整い、品貨優良だとして市場で高い評価を得た前出の記事からも窺える。
加えて、尖閣諸島はカツオの好漁場な上、沿岸近くで釣れるため 1 日に数度の出漁できるという利点があった。
尖閣海域は、他の漁業者には、垂涎の好漁場だったが、遠隔の地にあり帆船手漕ぎに出漁はとても不可能だった。このため、古賀の独壇場、古賀の海だった。

古賀は、カツオ王国を目指して、向かうところ敵なしの快進撃だった。

和平山（魚釣島）事務所前で揃う。男たちは土佐から来たカツオ節製造職人か、
着物姿の女たちも土佐の削り婦たち？　真ん中に古賀辰四郎がいる。（明治 41 年）

突如　古賀村の消息絶える　人も家屋も　神隠しに遭った？

明治 41 年 5 月には、新聞人、知名士が、尖閣諸島に大挙渡島した。

宮田漏渓は、「ああ、これ古賀の王国にあらずや」と賛嘆、現地レポートした。

翌年末には、古賀は、列島経営の功績で藍綬褒章を授与された。

これを契機に、尖閣諸島は、内外から関心を呼び、渡島者も増加し、開拓状況は頻繁に報じられ、紙面を賑わしていた。

ところが、明治 44 年 8 月 26 日江陽丸は午後 3 時出港、「宮古、八重山、西表、無人島行」を最後に、尖閣諸島行きの発着広告はプッリと切れている。

古賀村の消息は、翌 45 年（大正元年）以降の新聞紙面から消えていた。

なぜに、突然、尖閣諸島の情報は途絶えてしまったのか。どこを探しても、古賀村の消息を報じたものはなかった。いったい、何が起こったのだろうか？

尖閣諸島の、古賀村の真相は、秘密のベールに被い隠されたままだった。

ほどなく、意外なところから情報が得られた。「宮古郡八重山郡漁業調査書」

（大正 2 年）と「尖頭諸嶼見聞記」（大正 4 年 6 月）の報告である。
驚くべき内容だった。前者に「大正二年中該漁業ニ従事スルハ漁船（日本型）二隻漁業者五十二人ナリ。内製造ニ従事スルモノ七人ナリ。全て男なり」。
後者には、島に永住者なく、1 年契約の漁師 22 名だけが居り、古賀村には、破れ朽ちた小舎が数軒佇み、床板がない小屋もあると報告されていた。
数年前までは、永久移住者は 200 名余り居て、賑わっていたではないか。
あのカツオ船漁師や製造場の男たち、削りの女たちは、いったい、どこに消え失せた？　まさか、神隠しに遭ったのではあるまい。
偉容を誇ったあの家屋工場も、「古賀の王国」は、跡形もなく消えていた。
いったい、どこに消え失せたか？　怪力乱神にさらわれたのでなければ、天変地異に襲われたとしか考えられない。地震、台風、高波・津波の災害に見舞われたと想定し、当時の記録をもとに検証してみた。
その結果、大正元年 8 月 28 日尖閣諸島を襲った台風が真犯人の公算が大きいことがわかった。

台風で 古賀村潰滅　カツオ王国の壮図　道半ばで 潰える

ここからは、勝手な想像で進める。
大正元年 8 月 28 日に襲った台風で、古賀村は、一瞬にして壊滅した。
家屋建物は倒壊したもの、堅固な石積みのお陰で死者は皆無だったと考えられる。もしも、死者が出たならば、一大事故として大騒ぎとなるが、当時の新聞は報じていない。石垣島測候所の記録も、「被害記録なし、台湾北部風水害甚大」としている。古賀は、その時は、どこにいたか。8 月 9 日付琉球新報には「この年県重要物産品に関する産業調査会が組織され、古賀は調査会委員の人に選定された」旨とある。伝令の早船が石垣島に到着し、潰滅の知らせに八重山支店は、慌てふためいて、すぐ那覇にいる古賀へ電報を打った。
古賀は、急ぎ石垣へ向かい、石垣島から、尖閣諸島に着いたのは、台風から 2 週間余り経った後だろう。堀割に向かう艀から、惨状を目にして驚いた。
石積みだけを残して建物は吹き飛ばれ、古賀村は廃墟と化していた。
永住民たちは、急ぎ引き揚げたため姿はなく、二度と島に戻ることなかった。

「其の財を費やすこと三拾餘万円、年月を積むこと二拾有五年。單身創業的の勇氣を揮つて」作り上げた古賀の王国は壊滅した。哀れなる哉、古賀辰四郎。一人の死者も出さなかったのは幸いだったが、壊れはてた姿を見て呆然自失した。
古賀のカツオ王国を目指した快進撃は、台風という思わぬ伏兵によって、失墜した。古賀村は木っ端みじんに破壊され、彼の夢は道半ばで潰え去った。

本来なら、豪胆不敵の彼だから、捲土重来を期して、再挑戦するはずだが、ことが台風だけに、いつまた襲来するか分からない。今度は命まで奪われるかも知れない。ならばと、列島経営から撤退をすぐに決意した。

以後、古賀は、八重山古賀支店から、年契約の漁師を送って、カツオ漁を営むだけで、再び島を訪れることがなかった。

大正 7 年 8 月 28 日古賀辰四郎は、享年 62 歳で亡くなった。

どこで、如何なる病で、亡くなったか、葬儀の様子は一切分からない。

息子の善次も記していない。何が彼の死を早めたのだろうか？

志半ばでの早過ぎた死であった、まさに巨星落つである。

大正元年 8 月 28 日に、台風で、古賀村は壊滅し、列島経営から撤退した。それから 6 年後の 8 月 28 日に、奇しくも台風被災した同じ日に亡くなった。

古賀が列島経営から撤退した後、古賀村跡の石積み囲いに建てられた漁師の避難小屋？半ば壊れかけている。昭和 14 年撮影。（正木譲提供）

発動機船時代到来　古賀の海　国内好漁場へ　幕開け

古賀が列島経営から撤退の頃には、尖閣海域は、新たな幕開けを迎える。

発動機船時代の到来である。明治 39 年静岡県水産試験場船富士丸が初めて石油発動機船による操業試験に成功した。これを契機にカツオ船の動力化が始まった。沖縄では、明治 43、44 年以降、発動機船が普及していった。

漁船は帆船から、発動機船に切り替わりつつあった。

沿岸から沖合へ出漁できるようになり、遠洋漁場での操業が可能となった。

明治 42 年台湾でカツオ業が始まった。翌 44 年には総督府主導による漁場調査を実施している、その結果、漁場は、北は尖閣諸島より、南は火焼島、紅頭嶼に及び、東は八重山沖合から、沖縄県下にまで拡張されつつあった。

台湾総督府だけでなく、鹿児島、宮崎、長崎の各県水産試験場は、試験調査に乗り出し、新漁場発見が相次ぎ、操業範囲は拡大していった。

これまで、尖閣海域は好漁場だったが、遠隔かつ荒海のため帆船による出漁は不可能だった。他所から船は寄せ付けず、古賀の独壇場の海だった。

発動機船の出現によって、尖閣海域は、有望な漁場として着目されることとなった。古賀の海から、新たに国内好漁場へ開花していく幕開けである。

大正期には、カツオはもとよりマグロ、カジキ、サバ、タイ類の好漁場として、国内各地から漁船が蝟集した。

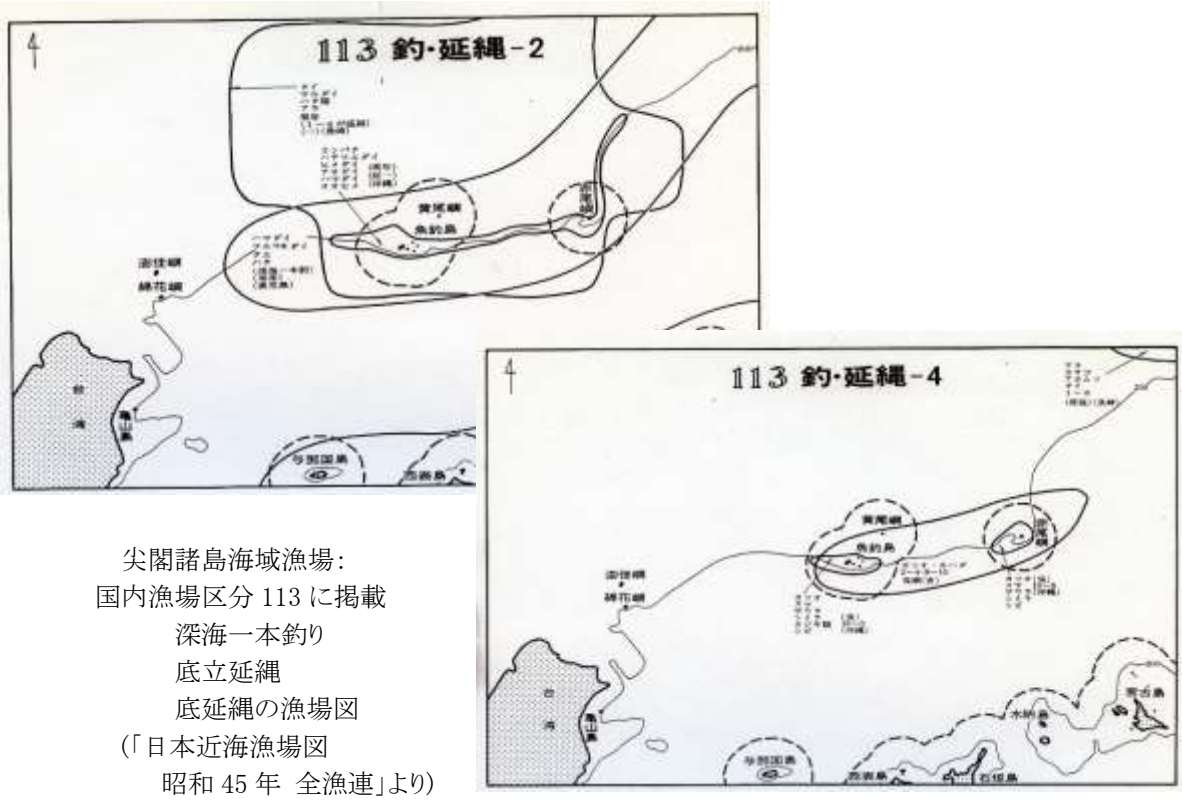
底魚の漁場としても着目され、深海一本釣船も入り混じって賑わいを見せた。

尖閣海域は、黒潮回廊の東シナ海に位置する国内有数の漁場となった。

また、海域は、多くの種類の魚、寒暖の魚が集まり、多様な漁法も可能だった。

昭和 45 年(1970 年)、全漁連は、全国の漁協、都道府県の水産試験場にアンケート調査し、「日本近海漁場図」を作成した。

同漁場図では、尖閣海域は、国内漁場海域区分１１３として、 底曳網、まき網、刺網、釣・延縄の７漁場図が示されている。



尖閣諸島海域漁場:
国内漁場区分 113 に掲載
深海一本釣り
底立延縄
底延縄の漁場図
(「日本近海漁場図
昭和 45 年 全漁連」より)

上段：　ヤイト 一本釣り（宮古島伊良部）　　タイ類 底延縄（沖縄本島糸満）
下段：　タイ類 深海一本釣り（鹿児島指宿）　　クロマグロ はえ縄（八重山石垣）

もしも 命長らえていたならば　再起図り　恒久建物に変貌？

古賀が、もしも、早死にせずに、命長らえていたならば、どうであろうか。

世界の真珠王と言われた御木本幸吉は、昭和 29 年(1954 年)に 96 歳で亡くなっている。古賀が沖縄に渡った明治 12 年代には、御木本は米穀商から海産物商に転じている。二人を引き合わせたのは、泡盛から夜光貝、高瀬貝の取引を通してであろう。古賀に帝国大学箕作佳吉教授を紹介したのも彼である。箕作の推薦で久場島(黄尾島)調査した宮嶋幹之助の論文には、協力者の一人として御木本の名が記されている。古賀は、列島経営から撤退したあと、大正 3 年 5 月には、御木本と八重山で真珠養殖事業を始めている。彼の亡き後、古賀商店八重山支店は、戦争直前まで、御木本と養殖種貝の取引を続けている。

古賀は安政 3 年(1856 年)、御木本は安政 5 年生まれで、古賀が 2 歳年長である。それにしても、彼の 62 歳の死はあまりに早過ぎた。

もしも命長らえていたならば､昭和元年(1926 年)には 70 歳、昭和 11 年(1936 年)には、齢 80 歳になる。御木本のように長命ならば、終戦翌年の昭和 21 年(1946 年)には 90 歳である。
このようにみてくると、古賀は遠い時代の人間ではない。

明治 42 年には石垣島測候所は、台風に耐えられるレンガ造り二階建に改築されている。大正半ばから昭和に入ると、コンクリート造り建物が建ち始めた。
昭和 19 年には、東京中央気象台長藤原咲平は、尖閣諸島は気象上の要衝に位置しているとして、魚釣島に、台風に耐え得るコンクリート造り測候所新設を計画したが、戦時下で断念した。賢明なる古賀のことだから、コンクリート恒久建物に興味を懐いていたのは、十分考えられる。もしも、彼が病に倒れず、健康で命長らえていたならば、捲土重来を期して、再起を図っていたに違いない。
その時は、昭和期まで待たずして、コンクリート造りの恒久建物が立ち並ぶ開拓根拠地古賀村に変貌していたかも知れない。これら恒久建物は、台風にも吹き飛ばされず堅固盤石である。ならば、列島経営の火は消えることなく灯されて、限りなく発展を遂げていたものと思われる。

古賀の夢　漁業王国？　　魚釣島古賀村に 一大漁業基地 建設

発動機船の出現は、尖閣海域にも、各地から漁船が押しかけるなど、大きな変化をもたらした。大正末期から昭和初年頃には、カツオ船、マグロ船、カジキ突船、サンゴ船がこぞって操業した。多くの漁船が尖閣海域を行き来し、国内有数の漁場として賑わいを見せていた。

その只中に、魚釣島古賀村は位置していた。だが、そこには古賀の姿はなく、列島開拓拠点の古賀村は、台風で被災し廃墟のままだった。八重山古賀支店から１年契約で派遣された漁師たちが寝起きする粗末な小屋が数軒佇んでいるだけだった。もしも古賀が存命していたなら如何せん？
勝手な想像をめぐらしてみた。古賀村は往昔の茅葺の家並みから、コンクリート造りの工場、事業所に建て替わっていた。

村の中央、鰹釜納屋の石積み前には、創業時の範に則り、国旗日の丸が高々と掲げられて、ヘンポンと翻っている。今カツオ漁の真っ盛りか、林立する工場の煙突から勢いよく黒煙が上がっている。製造場前の広場には、でき上がったカツオ節が一面天日干しされている。その横には出荷待ちなのか、カツオ節が箱詰めされうず高く積まれている。海岸に目をやれば、掘割は大きく拡張され、何隻か

の漁船、運搬船が出入りし、沖待ちの船もいる。桟橋では、海の男たちが魚の水揚げや荷物の出し入れで忙しく動き回り、怒号と喧騒で喧しい。よく見ると海岸端には、サンゴも並べられている。接岸している漁船はサンゴ船だったのか。

漁師たちは白、桃、赤と水揚げしたサンゴの仕分け作業に余念がない。

古賀はカツオ節製造に多大な期待を持ち、列島経営の要としていた。

この光景から察するに、カツオ漁は大きく進展し、カツオ王国の夢は実現しつつあるようだ。加えて、一度は諦めたサンゴ漁にも、発動機船を拵えて再挑戦を果たし、成果を収めつつある。

だが、パイオニア古賀の壮図は、カツオ、サンゴだけでは満足しない。

海の方では、突き船がカジキを追い回している。マグロ船甲板では男たちが声掛け合いながら揚縄の最中だ。食いついたマグロが波間から姿を見せた。10 数匹の大物たちだ。古賀は、尖閣海域で繰り広げられる勇壮な光景を見て、如何なる夢を描いただろうか。

道半ばで亡くなった彼の壮図、鴻鵠の志は知る術はない。

だが、カツオ・サンゴ王国から、さらなる躍進を遂げれば、その先は漁業王国に帰着する。ならば、古賀の列島経営の究極は、漁業王国の実現だったのではないか。尖閣諸島海域は、東シナ海の黒潮回廊に位置し、国内有数の漁場である。

カツオ、マグロ、カジキ、底魚などの好漁場として全国各地から漁船が蝟集している。古賀は、この只中に位置する魚釣島古賀村に、一大漁業基地建設を夢見ていたかも知れない。この壮図こそが、国家への貢献、即ち「列島ニ対スル事業ノ経営ハ・・帝国（わが国の）産業界ニ貢献スル所頗ル大」なる所以、己の使命と見なしていたからである。

古賀の早過ぎた死は、沖縄のみならず、日本国家にとって大きな損失だった。

列島経営撤退が招いたもの　台湾中国の横暴　政府の弱腰姿勢

1968 年国連のエカフェが東シナ海尖閣諸島に石油賦存の可能性が高いと報じた。1978 年 4 月 11 日早暁、尖閣諸島付近の海上に夥しい数の船影が姿を現した。マストに五星紅旗をひるがえした中国武装漁船団で、その数 200 隻余りを数えた。1970 年 10 月中国は尖閣諸島の領有権を初めて主張したが、その 8 年後、エカフェ発表から実に 10 年後、突如武装漁船を仕立てて、押しかける謀略を仕掛けてきた。

中国武装漁船団は、海上保安庁の巡視船の警告を無視して、領海侵犯を繰り返した。漁民たちは尖閣海域へ出漁できず、中国側の横暴に怒ったものの為す術は

なかった。国会は紛糾し、日中友好条約の締結を、即時棚上げせよと強硬意見も飛び出した。だが、政府は、ただ抗議するだけで、的確な手も打てず、オロオロ狼狽するだけだった。

中国武装漁船団は、200 隻にふくれ上がり、魚釣島北西沖の領海外に終結している。
日本政府は断固たる措置もとらずうやむやに終わる。（沖縄ﾀｲﾑｽ 1978.4.19 紙面写真）

中国側の退去で、事件はうやむやに付されたが、中国はほくそ笑んだであろう。

日本政府がどんな出方するかを探る予行演習は、予想外の好結果が得られたからである。

1992 年 2 月 25 日中国は尖閣諸島を中国領土とする国内海洋法を制定した。

さらに 2010 年 10 月 21 日、中国外務省馬朝旭報道局長は、「尖閣諸島海域は、“中国漁民の伝統的漁場”である」と声明した。

1972 年 2 月には、台湾も「宜蘭県蘇澳の漁民が戦前から尖閣諸島を漁場利用していた」として、宜蘭県に編入した。

2005 年、台湾は、尖閣諸島を自国海域にした台湾暫定執法線を設定し、八重山・宮古諸島を除いた海域に漁業権を主張した。

明治 40 年代に発動機船ができて、尖閣海域に出漁できるようになったのだが、なぜか、中国は、帆船手漕ぎ船の昔から、「尖閣諸島海域は、“中国漁民の伝統的漁場”」だったと、また台湾も、「宜蘭県蘇澳の漁民が戦前から尖閣諸島を漁場利用していた」と言明している。この主張が誤りであるのは明らかだ。

いったい、どんな船で、何の魚を獲りに、潮の流れが速く、波高く危険極まりない尖閣海域くんだりに出漁していたと言うのだろうか。

もしも、古賀が命を長らえていたなら、列島経営は絶えることなく綿々と続いていた。開拓根拠地魚釣島古賀村は、一大漁業基地として、大きな発展を遂げて

いた。ならば、台湾中国のこんな横暴に付け入る隙など与えなかったはずである。
尖閣諸島は、れっきとしたわが国領土である。
古賀は、尖閣諸島に高々と国旗日の丸掲げ、日本領土であると誇示していた。
にもかかわらず、情けないのは政府の弱腰対応である。
台湾中国の外交攻勢の脅しに屈し、尖閣諸島へ自国民の上陸を禁止してしまった。地元石垣市も、沖縄県も、国会議員も、何人も、上陸してはならないと。

戦後の日本の不幸は、政治家たちが、領土を守る気概と勇気を、誇りと信念を、志と叡智まで失ったことである。領土主権を侵害されても、中国を怒らすまいと、姑息な手段、事勿れ主義に終始し、主権国家として断固とした措置もとれずに、とろうともせず、国家百年の大計を見誤っていることである。

もしも、古賀が生きていたなら、この無様な状況に対しどんな思いを懐いただろうか。きっと、吃驚仰天し、怒り、悲しみ、嘆いているに違いない

（了）

鰹釜納屋前での記念写真 向かって右は婦女子と奉公にきた子供たち。中央は古賀ら幹部と客人、左は漁師たちが陣取る 日の丸ポール右寄りに古賀辰四郎が見える。（明治 41 年）

※本稿は、尖閣研究叢書 「尖閣諸島盛衰記 なぜ突如、古賀村は消え失せた？」をもとに作成しました。詳しく知りたい方は同書をご一読下さい。